

2025 年度（第 16 回）試験問題解説

1. 下顎骨関節突起骨折の骨頭転位に関与する筋肉として正しいのはどれか。1 つ選べ。

- a) 咬筋
- b) 側頭筋
- c) 顎二腹筋
- d) 内側翼突筋
- e) 外側翼突筋

正解：e

解説

外側翼突筋の働きで、骨頭は前方、内方、下方へ転位する。

参考文献

田嶋定夫：顔面骨骨折の治療 改定第 2 版 克誠堂 175-196. 1999

上石 弘：頭蓋顎顔面外科 術式選択とその実際 医学書院 86-92. 2008

Tabishur Rahman: Traumatic superolateral dislocation of the mandibular condyle: case report and review. British Journal of Oral and Maxillofacial Surgery. 54, 257-459. 2016.

2. Le Fort I 型骨切り術の合併症として最も頻度の低いものはどれか。1 つ選べ。

- a) 歯髄損傷
- b) 上顎洞炎
- c) 顎骨壊死
- d) 内頸動脈損傷
- e) 眼窩下神経麻痺

正解：d

解説

Le Fort I 型骨折に関してかいつまんで解説してある。全体で合併症は 6.7-8.77%とされている。

Moorhead A, Winters R, Serra M. Le Fort Osteotomy. [Updated 2024 Aug 12]. In: StatPearls [Internet]. Treasure Island (FL): StatPearls Publishing; 2025 Jan-. Available from: <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/books/NBK564372/>

3. 顎裂部骨移植について正しいものはどれか。1つ選べ。

- a) 骨移植前に歯列矯正が必須である。
- b) 顎裂部への歯牙の誘導を目的とする。
- c) 腸骨の皮質骨が最も多く用いられる。
- d) 披裂側犬歯の萌出後に行うことが多い。
- e) 未萌出歯が存在しない場合は必要ない。

答え b)

解説

- a) 術前の矯正治療は必ずしも必要ではない。
- b) 顎裂骨移植の目的は顎裂の骨欠損部に十分な骨梁と健常な歯槽堤を形成し、同部に歯を萌出、誘導し、歯科矯正治療が可能な状況を作り出すことである。
- c) 腸骨からの海綿骨移植を行うことが多い。
- d) 犬歯萌出前に行うことが多い。
- e) 骨架橋形成による上顎骨の安定や顔貌の改善などの目的で行われることがある。

参考文献

斎藤功ほか筆頭著者 8 名：【特集】長期成績を踏まえた顎裂部骨移植のコツ。形成外科 61 巻 7 号 779-869, 2018

4. 不適切問題と判定

5. 頭蓋骨縫合早期癒合症に対する頭蓋形成術に関する以下の記述のうち、誤っているものを1つ選べ。

- a) Spring-assisted cranioplasty は、本邦においてもよく用いられている術式である。
- b) 骨延長法による頭蓋形成術では、一期的頭蓋形成術よりも術後に骨欠損を生じにくい。
- c) Strip craniectomy とヘルメット矯正を組み合わせる治療は、近年普及しつつある。
- d) 頭蓋内容積の拡大を伴う一期的頭蓋形成術では、皮膚の伸展性が頭蓋拡大量の制限要因となる。
- e) 骨延長法による頭蓋形成術では、基本的に延長器を取り外すための手術がもう一度必要になる。

正解：a

解説

- a) 現在認可されている製品が存在しないこともあり、本邦では一般的な術式ではない。
- b) 骨延長法は骨欠損を生じにくい術式である。
- c) Jimenez の報告以来、本邦においても広く用いられるようになってきている。(Barone CM, Jimenez DF. Endoscopic craniectomy for early correction of craniosynostosis. *Plast Reconstr Surg.* 104:1965-73. 1999)
- d) 頭皮の伸展性は前頭眼窩骨片の移動の制限要因である。
- e) 骨延長器を使用した場合、基本的には延長器の取り外しのための手術が必要である。

6. 皮弁とその栄養動脈の組み合わせで誤っているものはどれか。2つ選べ。

- a) Abbe flap labial artery
- b) Nasolabial fold flap Facial artery
- c) Axial frontonasal flap Dorsal nasal artery
- d) Median forehead flap Infratrochlear artery
- e) Submental island flap Inferior labial artery

正解：d、e

解説

- d) Median forehead flapの栄養血管はsupratrochlear arteryである。
- e) Submental island flapの栄養動脈はsubmental arteryである。

参考文献

形成外科ADVANCEシリーズ II-6 各種局所皮弁による顔面の再建最近の進歩(第一版) . pp84-92, 93-101, 109-117, 172-178, 克誠堂出版, 東京, 2000Grabb's Encyclopedia of flaps. Chapter 123; pp311-313, Lippincott Williams & Wilkins 4th ed., 2015

7. 眼瞼形成術について、正しいものはどれか。1つ選べ。

- a) 下眼瞼脱脂術で注意すべき外眼筋は下直筋である。
- b) 目頭形成術では redraping 法や W 形成術が用いられる。
- c) 下眼瞼眼窩脂肪移動術は眼窩脂肪を上眼瞼に移動する。
- d) Hamra 法は結膜切開から下眼瞼眼窩脂肪移動術を行う。
- e) 眉毛下皮膚切除術で生じる変形には tenting line がある。

正解：e

解説

- a) 下眼瞼脱脂術で注意すべき構造の1つに下斜筋がある。
- b) 目頭切開では Z 形成術と redraping 法が行われる。
- c) 下眼瞼眼窩脂肪移動術は眼窩隔膜を切開し眼窩脂肪を眼窩外に移動して上顎骨、頬骨前面に縫合固定するものである。
- d) Hamra 法は経皮アプローチによる眼窩脂肪移動術である。
- e) 眉手下皮膚切除による上眼瞼形成術において内側皮膚切除量が多い場合や眉毛外側低位血の症例では内眼角付近から眉毛内側へ向かうひきつれ線 (tenting line) が生じることがある。

参考文献

美容外科専門医のための基礎知識と標準手技
各論 I 眼瞼 49-91, 全日本病院出版会 2025

8. 口蓋裂初回手術の要点として誤っているものはどれか。2つ選べ。

- a) 裂の閉鎖
- b) 歯肉粘骨膜の縫合
- c) 口輪筋の縫合再建
- d) 粘膜欠損による瘢痕の最小限化
- e) 口蓋帆挙筋などからなる筋束の縫合再建

正解 b、c

解説

- a) ○ 口蓋裂の閉鎖は手術の要点である。
- b) × 歯肉の粘骨膜の縫合は、顎裂に対する手術である歯肉骨膜形成術 (gingivoperiosteoplasty : GPP) で行われる手技である。
- c) × 口輪筋の縫合再建は、口唇裂に対する手術で行われる。
- d) ○ 粘膜欠損による瘢痕は上顎発育を抑制するため、最小限となるように様々な工夫や術式が報告されている。
- e) ○ 左右の口蓋帆挙筋を縫合し筋束を形成することは、鼻咽腔閉鎖機能を獲得するうえで重要である。

参考文献

Woo AS: Evidence-Based Medicine: Cleft Palate. Plast Reconstr Surg 139: 191e-203e, 2017
Chepla KJ, Gosain AK: Evidence-based medicine: cleft palate. Plast Reconstr Surg 132: 1644-1648, 2013

9. 口唇口蓋裂に関わることについて、正しいものはどれか。1つ選べ。

- a) PNAM とは、口唇裂初回手術後に行う顎矯正治療である。
- b) 口唇裂初回手術の Millard 法は、三角弁法に分類される。
- c) 口蓋裂患者は、乳幼児期に真珠腫性中耳炎を合併することが多い。
- d) 口蓋形成術の Furlow 法では、V-Y advancement によって口蓋を延長する。
- e) 粘膜下口蓋裂における Calnan の 3 徴とは、口蓋垂裂、軟口蓋正中の透過性、硬口蓋後端の骨欠損の 3 つである。

正解：e

解説

- a) ×：PNAM とは Presurgical nasoalveolar molding の略であり、口唇裂初回手術の前に行う顎矯正治療である。
- b) ×：Millard 法は Rotation advancement 法に分類される。
- c) ×：口蓋裂患者に合併しやすいのは滲出性中耳炎である。
- d) ×：Furlow 法では、Z 形成によって口蓋を延長する。
- e) ○

参考文献

Calnan J: Submucous cleft palate. Br J Plast Surg 6: 264-282, 1954

10. 耳介について、正しいものはどれか。1つ選べ。

- a) 埋没耳の治療の第 1 選択は手術である。
- b) 耳介の発生は第 1・第 2 鰓弓に由来する。
- c) 立ち耳の主な成因は固有耳介筋の付着部異常である。
- d) 絞扼耳では対耳輪上脚は強く屈曲し耳輪が垂れ下がる。
- e) 耳介は顔面の発生の進行とともに外側かつ尾側へ移動する。

正解：b

- a) 誤り。埋没耳、折れ耳、立ち耳などの耳介変形に対する治療の第一選択は、非観血的治療である。耳介軟骨の可塑性の高い生後早期に介入することで、短期間に良好な結果を得られる。
- b) 正しい。耳介は第 1 および第 2 咽頭弓（鰓弓）の互いに面しあう縁に生ずる 3 対の耳介小丘から発生する。
- c) 誤り。固有耳介筋の付着部異常は埋没耳の成因のひとつとされる。立ち耳の成因は、対耳輪の形成不全と耳甲介の過剰形成である。
- d) 誤り。絞扼耳は、耳輪や舟状窩が垂れ下がり、前下方へ覆いかぶさるような先天異常で、対耳輪上脚あるいは対耳輪自体は消失し、軽重さまざまな形成不全を示す。
- e) 誤り。耳介は顔面の発生にともなって、元来の頸部側面の低い位置から外側かつ頭側へと移動する。そのため、第 1・第 2 鰓弓症候群では耳介低位がみられることがある。

参考文献

- ・野口昌彦、足立英子、前川次郎：第 4 章 外耳の先天異常 2. 小耳症以外の先天異常. 形成外科治療手技全書Ⅳ 先天異常. 波利井清紀、野崎幹弘監修 180-196 克誠堂出版, 東京, 2020
- ・William J Larsen, 相川英三、山下和雄、三木明德、大谷浩 : ラーセン最新人体発生学 第 2 版 349-355 西村書店, 東京, 2003
- ・福田修、荻野洋一：耳介の形成外科. 109-175 克誠堂出版, 東京, 2005